〈書評〉

# 橘木俊詔著
# 『課題解明の経済学史』
（朝日新聞出版、2012年）

宇佐見　義尚*

Yoshiaki Tachibanaki
*History of Economic Thought to Solve the Current Economic Issues*

Yoshinao Usami

本書を書評する理由は、二つある。

私が「書評」執筆に当たって最も留意していることは、その著作が著者にとってどのような動機で何を目的として書かれたものなのか、この点に関して私自身の中で十分に納得のいくものであるのかどうか。さらに、その著作が「作品」性を持ったものであるのかどうか。著作の「作品」性とは何か。内田義彦（1913－1989）によれば、社会科学における「作品」とは、「直接一般読者にとどき一人一人のなかでコペルニクス的転換がおこる事[1]」を狙った著作である。先ずこの点で、ここで取り上げている橘木氏の著作は、（私の独断基準ではあるが）まさに書評に値する「作品」である事を確認したい。本書の「はじめに」のなかで橘木氏自身が本書執筆の目的と狙いを、本書は「経済学の基礎知識のない人、あるいは昔一度は経済学を学んだ人であっても今はもう忘れてしまった人に対して、経済学は歴史的にどのような考え方を提供してきたかが理解できるように[2]」、そして読後の効果として「経済の諸問題に関して自分の主張は持てるようになる[3]」と書いている。この記述によって明らかに著者自身が専門家の「蛸壺」（丸山真男）から抜け出し、その結果として本書が素人でも分かり、素人だからこそ分かるリアリティに迫り、素人の日常性に緊張感をもたらし、素人に思考と行動にコペルニクス的転換をおこす事を本書が企図していると私は判断した。次に、昨年（2011年）の9月に刊行された橘木氏の著作『いま、働くということ[4]』を、たまたま本年度後期学期に私が担当するキャリア教育科目の授業「人生と進路選択[5]」の中で紹介をして、

* 亜細亜大学経済学部准教授　yusami49@asia-u.ac.jp

1) 内田義彦『作品としての社会科学』（同時代ライブラリー95）岩波書店、1992年（初版は1981年）、45ページ。

2) 橘木俊詔『課題解明の経済学史』朝日新聞出版、2012年、2ページ。

3) 同書、2ページ。

4) 橘木俊詔『いま、働くということ』ミネルヴァ書房、2011年。

5) この科目の授業報告書として刊行された宇佐見義尚責任編集『大学教育と進路選択』亜細亜大学、8号、2010年。この科目をめぐる詳細は拙稿「キャリア教育で変わる学生と教員」清水亮・橋本勝『学生・職員と創る大学教育』ナカニシヤ出版、2012年。

この著作がキャリア教育の基本書として有益であることを確信していたところ、本書が刊行されて橘木氏の仕事に改めて強い興味を持ったという背景がある。つまり本書を読むまでは、橘木氏の仕事は労働経済学やマクロ経済の実証研究が守備範囲と思い込んでいたが、橘木氏が突然（？）に「経済学史」と銘打って堂々と一書を打ち出したことに大いに啓発されたということである。

## 1．本書の内容要約と読みどころ

本書は、全部（四六判・239ページ）で6章からなる。各章のタイトルには、その内容を巧みに表現したフレーズ（下線は筆者）が付けられており読者の関心・好奇心を誘う。

第1章　古典派経済学　自由主義経済の魔力

第2章　新古典派経済学　市場経済への信仰

第3章　資本主義経済か、社会主義経済か

第4章　ケインズ革命　マクロ経済学の発展

第5章　社会保障という学問　貧困の排除

第6章　日本の経済学　近経とマル経の展開

この目次からも本書が従来の標準的な経済学史のテキストで扱われる内容をほぼ網羅的にカバーしていることが読み取れる。但し、従来の標準的な経済学史テキストの多くは日本の経済学は取り上げていないので、本書はこの点でも専門家の「蛸壺」から脱して、素人のリアリティ（日本語で書かれた本書において日本の経済学についての叙述は不可欠）に応えている。しかも、各章（第3章を除いて）のタイトルの二つ目のフレーズは、本書が経済学の思想に踏み込んでいることを示して、内容の深さ、面白さを十分に期待させてくれる。ところで読者が本書の叙述に難解さ（部分的に）を感じたならば、本書の書名になっている「課題解明」という本書の立ち位置を思い起こすことで目からうろこが落ちるように理解できることをアドバイスしておきたい。それでは、本書の内容を簡単に要約しながら本書の「読みどころ」（摂取）と「これはどうか」（批判）と私が考えるところを率直に書いていくが、読者の参考の一助になれば幸いである。

第1章は、アダム・スミスを「経済学の父」「経済学の始まり」として、スミス経済学が誕生する土壌（「摂取と批判」の対象）であった重商主義、重農主義の説明から始まる。重商主義、重農主義政策は、当時のイギリス、フランスの政治・経済状況の反映であることを明確に示すことによって、学問（社会科学）としての経済学（アダム・スミス『国富論』が嚆矢）との区別、重商主義・重農主義思想が学問以前の経済（「学」ではなく「論」）であるという経済学史上のキーポイントが押さえられている。アダム・スミス経済学の概説では、時代背景としての当時のイギリスの政治・経済状況の説明といくつかのキーワードによって手際よくスミス経済学の核心に迫っている。「イギリス議会制民主主義」「植民地主義帝国」「産業革命」「自然科学・社会科学・人文科学の発展」「利己心」「経済的自由の意義」「道徳哲学者」「スコットランド啓蒙派」「道徳感情論」「社会秩

序の形成」「人間の本性」「同感」「分業論」「価値論」「資本蓄積論」「経済史論」「重商主義批判」「財政論」「夜警国家」「市場経済」「見えざる手」「第三者の共感」「経済学の父」。これら一連のキーワードはスミス理解に必要不可欠であり、それぞれが意味ある関係性を有している。スミスの『道徳感情論』『国富論』は、「作品としての社会科学」（内田義彦）の代表的な著作である。その意味からも、本書の読者にとっては必読文献ということになる。解説書をいくら読んでも、コペルニクス的転換の示唆は得ることは出来ない。

第2章のテーマは、古典派経済学の延長線上にある新古典派経済学を「市場経済への信仰」の視点から把握することである。新古典派経済学の発展・展開の多様性は、市場経済への「信仰」という「思想」の根源に遡ってのみ本質を見ることができる。本章では、現在の日本が抱える労働者問題（非正規雇用、ワーキング・プア）、企業の利益第一主義（モラル・ハザード）、企業の社会的責任、社会保障・年金問題、キャリア教育、所得格差問題の理解に直接に役立つ。オーストリア学派、ワルラス経済学、マーシャル経済学を「課題解明」の視点から明快な叙述を展開している。本章での余談で、フランスとイギリスの文化・思考の特徴が経済学理論の構築に影響しているのではないかとして、フランスのワルラス一般均衡理論とイギリスのマーシャル部分均衡理論がそれぞれにお国柄を表しているという柔軟な発想は経済学史プロパーの研究者にはなかなか思いつかない。フランスは庭園でも全体が整然とした幾何学模様を好むのに対して、イギリス庭園では雑然とした自然のままの情景が好まれる。この好みの違いがフランスに一般均衡理論を生み、イギリスに部分均衡理論を生んだのではないかという。

第3章のタイトルは、本書において唯一、一つのフレーズで終わっている。この章だけに見られるこの変則をどのように読み取るか。読者にとっては、興味深い謎であり様々な憶測を楽しめる。あえてこの章にも他の章と同じような形のフレーズをつけるとすれば、「資本主義経済か、社会主義経済か　思想家の倫理観が鍵」、あるいは「資本主義経済か、社会主義経済か　選択の基準」ではどうか。橘木氏がなぜ第3章はタイトルのみに、「資本主義経済か、社会主義経済か」としたのか、興味は尽きない。本章では、①マルクス経済学の誕生（マルクス以前の社会主義思想を含む）、②資本主義経済のカウンター・パワーとしての社会主義経済の「実験」と失敗、③ソ連崩壊後のマルクス経済学と資本主義経済学の行方がテーマになっている。また、J・S・ミル経済学の位置づけ（資本主義から社会主義への過渡期の経済思想）は一歩踏み込んだ把握として評価できる。標準的な経済学史のテキストでは、ミルは古典派経済学の集大成者としての評価がほぼ定まっているが、本書ではミルの役割を「社会主義への橋渡し」として位置づけている。「思想家の倫理」に基づく社会主義思想の展開を評価する本書であればこその見解といえる。また、本章からマルクス経済学研究の現代的意味を読み取ることは重要である。私はこう読む。1917年のロシア革命、ソ連邦建国、東ヨーロッパ、中国、ベトナム、キューバによる社会主義国の登場から、1987年のソ連邦崩壊までの70年間は、現時点で振り返れば人類史上最も壮大な政治経済の「実験」ではなかったか。結果は社会主義経済の失敗ではあるが、資本主義経済のカウンター・パワーとしての役割は十分に

果たしたのであり、その意味での意義を認めないわけにはいかない。つまり、現代においてマルクス主義思想への理解は、①人類共同体の理想的理念として、また②実際の経済社会運営の反面教師として研究する意味がある。

第4章はケインズ経済学がテーマである。本書によれば、ケインズ経済学の革命性は次の二点に凝縮される。①「マクロ経済分析の出発点を作ったこと」（マクロ経済学の創始者）、②「政府の役割が重要であると主張したこと[6]」。ケインズは、ムーアの『倫理学原理』（功利主義批判）に心酔しており、ケインズは経済学を「道徳科学」（モーラル・サイエンス）と考えていることは、ケインズ経済学の課題が①経済効率、②社会的公正、③個人的自由であることからも明白である。ケインズ経済学が「社会的公正」という「価値判断」を経済学の目的に入れることが古典派経済学（A・スミス）の道徳哲学との違いであることを本書では強調する[7]。他方で、反ケインズ思想の経済学としてハイエクの経済学、フリードマンの経済学、R・ルーカスの経済学に言及することも忘れない。

第5章のテーマである社会保障（「貧困の排除」）の経済学は本書全体のメインテーマでもあると私は読みたい。社会保障制度の構築にどのように経済学は関わってきたのか。本書の読者としてはわが国の社会保障関係費の一般歳出費にしめる比率の大きさを考えると、この問題解決に経済学がどのような貢献をしてきたのかを経済学史の文脈の中で体系的に知りたい。本書では、こうした「おとな」の読者の要望にイギリス、北欧諸国の経済学を中心に記述してくれている。日本やアメリカにおいて社会保障・福祉の後進性をもたらした経済思想の解明は、今後ますます加速する高齢社会を迎えるわが国にとっては焦眉の課題になっている。本章で展開されているイギリスとドイツの社会保障に関する経済学史的考察は圧巻である。ロイド・ジョージの社会保障思想、ウェッブ夫妻のナショナル・ミニマム（生存権思想）、フェビアン社会主義思想、ベヴァリッジ報告の経済思想、サッチャーの経済学、トニー・ブレアー（労働党）の経済学、ビスマルクの経済学、ドイツ社会政策学会、旧歴史派経済学（ミューラー、リスト、ロッシャー）、新歴史派経済学（A・ワーグナー、G・シュモラー、ルヨ・ブレンターノ）、戦勝国の政治力学で東西に分裂させられたドイツは、社会主義体制の東ドイツと資本主義体制の西ドイツに分かれるが、その後の経済運営は周知のように東ドイツ経済の停滞、西ドイツ経済（社会的市場経済）の発展が顕著となり、1989年のベルリンの壁が崩壊して東ドイツは西ドイツに吸収される。勿論、戦後40年に及ぶ両陣営で活躍した経済学者は多数いるが本書では省略されている。関心のある読者は、鉢野正樹の三部作[8]の研究が参考になる。

本章における読みどころのもう一つのポイントは、北欧福祉国家と日米非福祉国家の比較である。

---

6) 橋木俊詔『課題解明の経済学史』朝日新聞出版、2012年、140－141ページ。

7) 同書、148ページ。

8) 鉢野正樹『現代ドイツ経済思想の源流』文眞堂、1989年、『現代ドイツ経済思想の展開』文眞堂、1993年、『現代ドイツ経済思想の課題』文眞堂、2011年。

北欧福祉国家を作った代表的な経済学者はスウェーデンのミュルダール夫妻で、それを政治課題とした政治家メーレル（「国民の家」）。北欧福祉の特徴の一つは、福祉の充実と人々の勤労意欲が両立する国民性を持つ点。つまり福祉の充実が、人々の怠惰にならない国民性に支えられている点にある。こうした先進的な北欧福祉国家に比較して日米の社会福祉がなぜ遅れているのか。その理由を本書では、日本の場合、福祉の担い手を家族、地域、企業に負わせる「風習」があり、国家による福祉思想が育ってこなかったことを指摘している。アメリカの場合は、「移民の国」という特殊事情から極端な「個人の自由」の尊重と国家依存を嫌う体質に国家による福祉政策が発展することはなかったとの指摘は常識的だが、日米両国のこうした風習、体質を乗り越えて安定的持続可能な福祉制度を構築する日米のそれぞれの経済学構築への展望が本書から得られるかどうか。読者に課せられた課題でもある。

第6章は、「日本の経済学」がテーマである。日本の経済学と言っても明治時代以降の経済学者を扱うもので、それ以前の経済論（学）は扱っていない。それはここでの「日本の経済学」が、そもそも「日本の経済学」は輸入学問であって、「経済学はもともとヨーロッパで成立、発展した学問なので議論はヨーロッパが中心とならざるをえない。しかし日本にも経済学が明治時代に輸入され、その後、徐々に発展していく[9]」というオーソドックスな経済学史テキストのスタンスを取っているからで、こうした文脈ではそもそも「日本の経済学」は根無し草のようなもので、生活（歴史・文化）に繋がる土着の経済論（学）への批判と摂取で新しく作られていくという「本来の日本の経済学」とは分断されてしまう。しかしこうした私の批判は本書に対する「ないものねだり」であることは百も承知だが、本書における「日本の経済学」の扱いには釈然としないものが残る。本書での「日本の経済学」の叙述は、明治以降の日本の「高等教育機関の整備[10]」に伴う輸入経済学に焦点が絞られていることから本書にしてみれば、それなりの整合性は保たれているということか[11]。「本来の日本の経済学」の視点[12]から、この第6章で取り上げられている「日本の経済学」は、輸入学問である「経済学」をいかに日本の経済学として土着させていったか、この点での橘木氏の評価が自ずと誰を本章に登場させるかの判断基準になっているものと、そうした判断が橘木氏にあったことと考えたい。

ところで、日本では、高度経済成長を達成して、戦後の復興から一気に経済先進国の仲間入りした資本主義経済の優等生であったが、そうした現実を否定する立場に立つマルクス経済学が少なく

---

9) 橘木俊詔『課題解明の経済学史』朝日新聞出版、2012年、4ページ。

10) 同書、209ページ。

11) 本書は、橘木氏の前作『早稲田と慶応―名門私大の栄光と影』講談社現代新書、2008年、『東京大学エリート養成機関の盛衰』岩波書店、2009年、『三商大　東京・大阪・神戸―日本のビジネス教育の源流』岩波書店、2012年があって初めて書き上げられるもので、この三著が本書に集約されているとも言える。

12) 本稿では、近世日本の経済思想（鈴木正三 1579－1655、石田梅岩 1685－1744、安藤昌益 1703－1762、二宮尊徳 1787－1856、横井小楠 1809－1869）を考えている。

てもソ連邦崩壊までは一大勢力を持っていたという不思議の国であったとの指摘には大いに同意する。大学における「実践と学問の乖離」。学生時代はマルクス思想に心酔して学生運動に大暴れをするが、卒業と同時に見事な企業戦士に変身する。「学生時代に学んだことと社会・経済での実践は異なるという、一見矛盾に満ちた[13]」大学教育が行われていたが、しかしその当時の大学教員でこの矛盾を意図して創り出すような「世慣れた」人は皆無であり、自分たちがこうした矛盾した教育をやっているとは気が付きもしない「専門の蛸壺に入って抜けられない、抜けようとはしない人」であったことが実情・実態ではなかったかと私は考えている。こうした大学教育の矛盾を、本書では「学生時代にマルクス主義の一つの柱である平等主義を学んだ高級官僚と企業経営者は、日本の社会と企業を運営するに際して、資本家と労働者の対立をできるだけ大きくしないような政策が望ましいと考えた[14]」と擁護しているが、この擁護には賛成できない。当時の大学教員、おそらく今の大学教員にも根強く残っているのだが、大学教育は学生のためにあるのではなく教員の研究活動の一貫であってその研究が学生の将来（就職）に役立つかどうかは全く視野に入れていないということに微塵の罪悪感も感じていない、そのような性格の大学教育体制を擁護することになるからである。本書によるこの擁護論[15]は、著者がいみじくも書くように「あまりにもうがった見方[16]」として、本書改訂の際にはぜひとも再考を促したい。

## 2．逆説の「課題解明の経済学史」（「温故知新の経済学史」）

本書は、経済学の歴史を、アダム・スミス経済学（「経済学の生誕」[17]）を嚆矢として、経済学生誕の前夜（重商主義、重農主義）から、古典派経済学、新古典学派経済学、マルクス経済学、ケインズ経済学、反ケインズ経済学、福祉経済学、日本の経済学と時系列的（一部を除いて）にその時々の経済学が負った課題を解明することに焦点を当てて、それら経済学の現代的意味を問いかけながら叙述する方法をとっている。この叙述方法の有益性は、新しい経済学がその時々の実践的な課題解決のために成立したものであることを改めて読者に意識させてくれると同時に、そこでの課題解決の解答（成功、失敗の両面から）が現代の課題解決にどのように役に立つのか、立たないのかを探りながら、経済学の歴史を整理して見せることで、現実的・実用的な解答を求める「おとな」（一般社会人、素人）の要望に応える、あるいは読後の満足度を高めることに成功していると評価できる。ところが、この方法だと本書の最初から順を追って読み進んでいくように書かれている本書は、日々の仕事に追われる多忙な「おとな」には、いささか不満が残る。そこで、本書の姉

---

13) 橘木俊詔『課題解明の経済学史』朝日新聞出版、225ページ。
14) 同書、225ページ。
15) 同書、225－226ページ。
16) 同書、226ページ。
17) 内田義彦『増補　経済学の生誕』未來社、1962年。

妹編として現代の課題ごとにそれを解決する為の経済学を追いかけるという「逆説」の経済学史が欲しくなる。現代の課題、例えば「南北問題」「環境問題」「地球温暖化問題」「自然災害問題」「原子力エネルギー問題」「少子高齢化問題」「年金問題」「ワーキングプア問題」等々。こうした現代の諸問題に関係させて経済学の歴史を遡る経済学史、さしずめ「温故知新の経済学史」（仮称）とでも表現できようか。

## 3．本書を経済学部に在籍するすべての学生に推薦したい

本書は「朝日おとなの学びなおし」シリーズの一冊であるので、そもそも学生のテキストとして書かれているわけではない。最初に指摘したように本書は、経済学を全く学んだことのない、または学んだけれど忘れてしまった一般社会人、いわば専門家ではない「素人」の読者のために書かれた「作品」である。それにも拘わらず、そのような「おとな」「素人向け」の著作を、大学で経済を専門に学ぶ学生に、なぜ推薦するのかの理由はこうである。本書を読むことで、学生に「おとな」の自覚が促せると思うからである。「おとな」の自覚とは何か。それは学問を実際の生活に役立たせる自立した感覚（学問に取り込まれない）のことをいう。経済学史は、かつて「不毛な学問」と言われてきたように、過去の知的遺産を手前勝手に解釈して自己満足に陥るばかりでそこからは何の生産性もないものと批判されてきたことがあった。大学で「経済学史」講義を受講する学生が、そのような不毛で退屈な経済学史から抜け出すために、本書の視点と方法が役立つと確信するからである。本書を経済学史講義の入門書としての推薦ではなく、むしろ本書を卒業を控えた4年生に向けた「おとな」への準備の書として推薦したい。